

令和6年度 道志中学校校内研究について(EBC)

1

※Evidence-Based CoOperation

研究主題

『個別最適な学びと協働的な学びで、
主体的に学習する生徒を育成する』

副題

～組織でWEBQU等を活用した安定と活性化を通して～

山梨県道志村立道志中学校

山梨県道志村立道志中学校

2



令和のやまなし教育活動」モデル推進事業

山梨県教育委員会からの支援メニュー

- A イエナプラン的教育(自立した学習者の育成)
- B 外国語教育(コミュニケーション能力の育成)
- C 探究型教育(地域の課題解決能力の育成)
- D 山村留学(自己肯定感の育成)

本研究で提起したいこと

- 提起1 **安定と活性化**を両立した学級集団づくりを実現する
- 提起2 校長を中心に教職員組織で協働実践「**チーム学校**」
- 提起3 「**共通指標**」で問題の早期発見・主体性の実現・継続指導
- 提起4 **心理的安全性**の確保を徹底する
- 提起5 教職員の**主体性**と**同僚性**の構築
- 提起6 対外機関の専門家との**連携**
- 提起7 安定を基盤に「**単元内自由進度学習**」を全教科で推進
- 提起8 **実証研究**を通じた人材育成
- 提起9 学級の「**持ち上げ**」の成果と可能性

Evidence-Based Cooperation

公立中学の多様な生徒に対する**根拠**ある適切な指導を**組織的**に実践(PDCAサイクル)する

- ①標準化検査の**データ**を**根拠**に、
- ②**面接・観察・パフォーマンス**等も加味しながら、
- ③個人と集団の実態を**複数**の目で捉え、
- ④教職員の**組織的**な指導で
- ⑤教育課題を**改善**する

(いじめ・不登校・学力保障・人材育成等)

生徒の実態

- 1 等質的なグループで活動し、人間関係が閉じている
- 2 人間関係の固定や発言者の固定によって**階層的序列**が形成
- 3 階層的序列によって協働しながら改善する意識が希薄化
- 4 学級の荒れがあると階層的序列は強化される

教職員の実態

1. 2年で教職員が**人事異動**
→適切で一貫した対応が難しい
2. 教職員は若手が多く、階層的序列への対応**経験が不足**している
3. これからの教育課題に対応出来る人材育成

階層的序列・人事異動・経験不足等の課題を
根拠ある指導で組織的に改善する

今の教職員で成果を出すためには共通指標が必要

◎標準化検査のデータ

◎日常的な面接・観察の情報

教職員で対応策を共有して協働実践の基盤をつくる

「共通指標」として
観察・面接と合わせてWEBQUを活用

- 1 年間3回の「学級満足度尺度」(信頼性と妥当性の認められた標準化検査WEBQU)を活用し、個人と集団の**実態分析**を行う
①生徒の**認知**に寄り添う ②問題の**早期発見** ③**組織対応**
- 2 教育実践の「**優先順位**」の根拠となる、実態に適した対応の理解
- 3 個と集団の実態に対する適切な指導を「**協働実践**」
- 4 PDCAサイクルで「**組織対応**」する
(観察・情報共有・本人との相談・複数職員で確認の徹底)
- 5 **小中連携** 共通指標を入学前から共有することで、入学後の生徒に学級適応の成果

「チーム学校」は必然的な実践

教育課題の現状

年々悪化している文科の「諸問題調査」の実態(令和4年)

① いじめ認知68万件→**いじめの重大事態923件**

② 小中高の自殺者 411人

③ 児童・生徒の不登校 約30万人

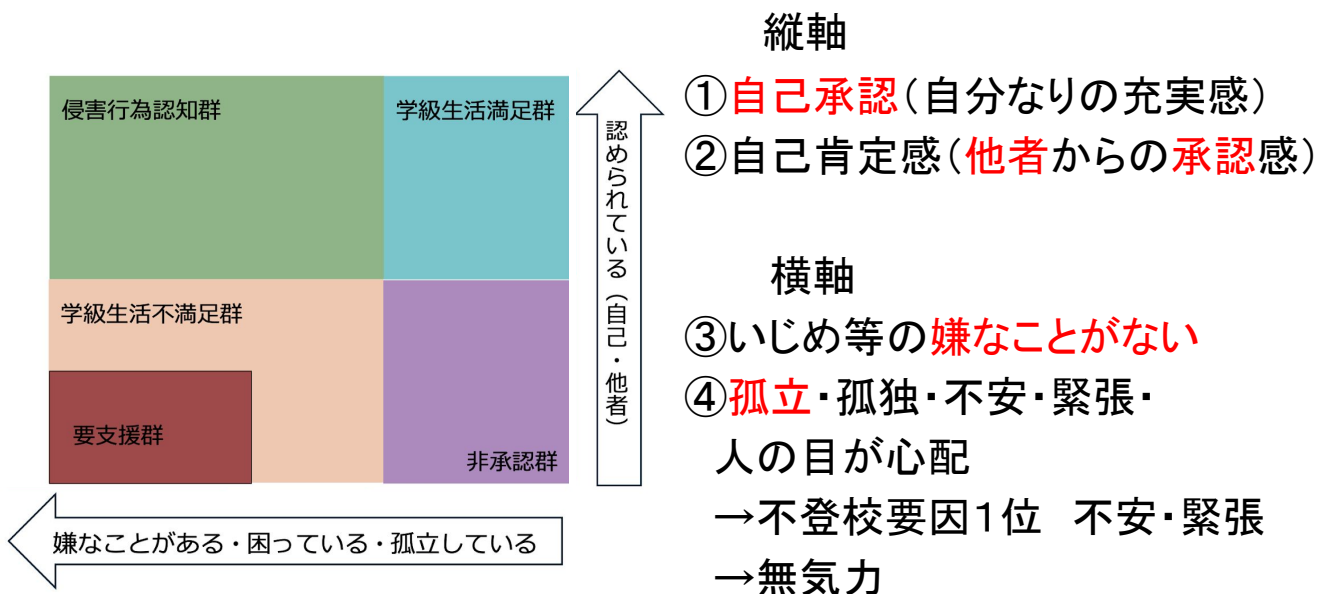
④ 公立教職員の精神疾患 約6,500人

私的関係を公的關係へ移行する

生徒の人間関係は「**特定化信頼**」が圧倒的に多い

- ・気が合う、趣味が同じ等
→ **人間関係の固定化**
- ・知識及び技能の質問等で、**発言者の固定化**

WEBQUの2軸



心理的安全性の確保＝安定と活性化の両立

早稲田大学 河村茂雄教授

- 1 協働学習の基盤となる学級集団の「**安定**」
- 2 協働学習の成果が高まる「**活性度**」

安定度 × **活性度**

5 安定化 **5 創造的** ※本校全学年

- | | | |
|--------|-------|----------|
| 4 固定化 | 4 活用的 | |
| 3 流動化 | 3 遂行的 | 指示に従うレベル |
| 2 不安定化 | 2 停滞的 | |
| 1 混沌化 | 1 不履行 | |

「班の3つの機能の班活動」で安定を徹底する

- 1 「等質的なグループや人間関係に閉じている」生徒集団



- 2 「開かれた個」の育成が求められる※¹

学級や班(小グループ)を活かして、生まれも育ちも能力も違う他人が、
お互いに成長する場を生徒の力で協働して創造する



- 3 班の3つの機能

①**居場所** ②**目標を適える組織** ③**非認知能力の育成**

※¹河村茂雄(2017)「アクティブラーニングを成功させる学級づくり」 図書文化社

班の3つの機能で安定の基盤を創る

1 居場所づくり

班長を中心に班員にとって「居心地が良く嫌なことがない」ように適切な配慮と関わりを徹底し、多様な生徒に対応する

孤立させない・思いやり

2 目標を適える組織

できていること(成果)を大切にしながら、自分たちの課題を自分たちで改善する

規律と人間関係の向上
協働性・主体性

3 非認知能力の育成

毎日の班活動で配慮と関わりのスキルを育成する

自己肯定感・協調性
課題対応能力

班の3つの機能による安定度と非認知能力の向上が
相互交流・協働活動の向上に直結

教育課題、個人や多様な集団の型にも対応

1 居場所づくり

- 多様な生徒への配慮ある班編成⇔苦手な生徒
- 心理的安全性の確保(病気・心理・環境)

2 目標を適える組織

- 生徒主体の自治活動
- リーダー育成
- 合意づくり
- 嫌な事防止
- 承認感向上
- 挑戦による安定レベル向上

安定の質＝主体性の質

3 非認知能力の育成

- 多様性の理解
- 対等ではない
- 特性への対応

差別・無視→適切な対応

公的に取り組む組織」として機能する班活動で、 早期に協働学習の基盤をつくる

意図的・計画的に学級の班(小グループ)を活用し、「安定」を徹底する

- 1 リーダーシップの回転を行いながら生徒をゆるくつなぐ
 - 目標を達成(リーダー・フォロワー・他己承認)したら、次の班編成へ
 - ①班員を**少しずつ**変える ②**班長**も変える ③生徒同士を**ゆるくつなぐ**
- 2 生徒が主体となってPDCAサイクルをまわす
 - 班を起点に理想の学級の**取り組み課題**を設定する→対策方法の**合意**
 - 毎日取り組む→短学活で協議する
 - ルール^のの定着・協働できる人間
- 3 生徒同士での配慮と関わり、振り返りを促す

生徒同士の相互交流を支えるための 持続的な相談体制で不安や悩みを低減

- 1 健康管理(食事・睡眠・体重・出欠等)への配慮
- 2 毎日の「生活ノート」での相談・援助希求の発信
 - 生徒会活動で発案顔マークチェック
- 3 相談相手を生徒が選択する月2回の全校生徒面談
 - 困り感(ネガティブ認知)を言語化し、主体的対応で困難回避
- 4 一人一台端末で、相手を選択して相談できる体制の確立
- 5 標準化検査を学期に1回、生活調査を月1回実施
 - 教職員との相談体制→外部機関

※いじめ予防 教職員研修(三助法)・生徒会・PTA活動で徹底

指導の優先順位と対応の根拠を共有

質の高い相互交流には、個に応じた適切な指導と・連携・持続的援助不可欠

個別指導⇔(安定した)集団とつなぐ指導

- ①対外機関につなぐ ②人として尊重 ③丁寧なアセスメント
④協働意思決定 ⑤確認の徹底 ⇔ ⑥集団とつなぐ

- 1 病気** 医療機関との連携
- 2 心理** SCや思春期外来等の専門家との連携
心理アセスメントの実施
- 3 家庭環境**(虐待・ヤングケアラー等)※1～3は外部対応・連携
- 4 いじめや不登校への対応**(3次対応)
学級集団対応 崩壊・荒れ型・管理型・ゆるみ等→相互交流
- 5 多様な専門家との連携**
医療・SC・教委・校医・児相・住民健康課・特別支援学校・教科・心理の専門家等

教科における協働活動を組織的に実践する工夫

—WEBQU、学力、NINO等を一元化した座席表の作成—

3年1組	少人数特別学級	4 特別な支援を必要とし 3 特別な支援が必要 2 いじめ・不登校につながる可能性あり 1 虐待・虐待の心配	学習支援状況 3 1次支援 2 2次支援 1 3次支援
国語	児童生徒一人ひとりの結果を教職員全体で把握し、承認感の向上や被侵害感の低下をはかる必要があります。		
	せいと7 生徒7 NINO QU 記憶力 算数能力 読解力 帰属感 思考力 1 1 1 1 1	せいと8 生徒8 NINO QU 記憶力 算数能力 読解力 帰属感 思考力 2 2 2 2 2	せいと9 生徒9 NINO QU 記憶力 算数能力 読解力 帰属感 思考力 3 3 3 3 3
	せいと4 生徒4 NINO QU 記憶力 算数能力 読解力 帰属感 思考力 1 1 1 1 1	せいと5 生徒5 NINO QU 記憶力 算数能力 読解力 帰属感 思考力 2 2 2 2 2	せいと6 生徒6 NINO QU 記憶力 算数能力 読解力 帰属感 思考力 1 1 1 1 1
	せいと1 生徒1 NINO QU 記憶力 算数能力 読解力 帰属感 思考力 2 2 2 2 2	せいと2 生徒2 NINO QU 記憶力 算数能力 読解力 帰属感 思考力 3 3 3 3 3	せいと3 生徒3 NINO QU 記憶力 算数能力 読解力 帰属感 思考力 2 2 2 2 2

自由度の高い学習成立の基盤を 教職員組織で実現

WEBQU 4群	全国平均	20XX 年度				20XX+1 年度	
		5月	10月	12月	2月	5月	10月
満足群	41%	66%	81%	88%	93%	96%	96%
侵害知群	13%	3%	0%	6%	7%	4%	4%
非承認群	28%	15%	13%	3%	0%	0%	0%
不満足群	18%	16%	6%	3%	0%	0%	0%

20XX+2年度 6月100%→R5 WEBQU100% →R6 100%

河村 茂雄 監修(2021)アクティブラーニングを推進する学習集団/学級集団づくりのためのアンケート WEBQU解説書 WEBQU教育サポート

安定を基盤に「単元内自由進度学習」を全教科で推進 ーエビデンスと体験を根拠にした学習計画ー

- 1 WEBQUを活用して「安定と活性化を両立した学級づくり」を組織で実現
◎学力到達度検査では優位に高い
↓
- 2 「NINOとNRT」による自己分析
↓
- 3 自己分析と教科指導の関連で個別最適な計画(学習キャリアパスポート)
- 4 計画に沿った個別実践
↑ ↓
- 5 協働的な学習 (交流によって目標達成重視・目的ある交流)

NINO・NRTの活用事例

※自校の状況に応じて多様な方針・方策が可能

具体的な活用事例

活用1 生徒一人一人が「5つの認知能力」(NINO)の理解

「言語・数的・思考・記憶・処理速度」の「強み」

活用2 数的能力の躓きの発見と対応 (小学校の復習・改善)

活用3 数的能力・言語能力のクロス集計からバランスや強みを確認

活用4 NINOとNRTの相関表(実力を発揮できているか)

例えば「学力は高いが、学び取る実力発揮が不十分」

活用5 「学習に向かう力」のデータ(NINO・非認知能力)の活用

○協働性・励ます・教える → 3.7 ※ 3が基準

△どこが大事か考える → 2.3

1学期の実践～理科～

『化学変化が起こるときに 熱や質量の変化はどうなっているだろうか』

個別最適な学び

- ・一人一人の学力保障
- ・個に応じた指導
- ・いかに生徒が自ら学ぶか
学習キャリアパスポートを活用して、学習時間・
学習方法等を自分で選択して決定する。
- ・自分の特性や能力を知り「自立して学ぶ力」の育成

協働的な学び

- ・めあてを適えるための協働で、全員が目標達成
- ・学びの広がり、深まり、気づき
- ・新しいアイデアや創造

○NINOのデータを活用して自己分析をしながら、学び方を選択し自己決定する



○必要な助言や指導をする組谷先生



○2年生の協働性を高く評価

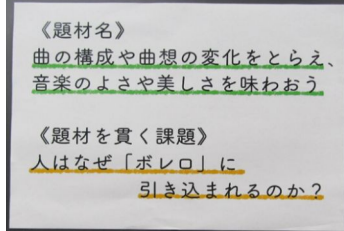


○認知能力検査NINOのデータと関連させながら、授業を振り返る生徒の様子



1学期の実践～音楽～ 『人はなぜ「ボレロ」に引き込まれるのか？』

題材目標を適え、
主体性を向上させる課題設定



学習のキャリアパスポートを活用して、
題材の目標や計画を見直す生徒



個人で学ぶことや協働して学ぶ
ことを自ら選択する



自分の考えやその根拠を伝える様子



1学期の実践～音楽～ 『人はなぜ「ボレロ」に引き込まれるのか？』

ICTを活用し、学び取る教材を自己選択する



距離の近さは心の近さの証拠



1学期の実践～全教科～



学習キャリアパスポート (根拠ある個別最適な学習計画)

【 科】 N I N O 一人一人能力が違う。やり方も違う。自分の特性を知りながら計画を立てる 年 番 氏名

この単元で身につけるべき力	知識・技能			何がどの程度できればB評価なのかを教員が記入	ABC評価						
	思考・判断・表現	学習指導要領の指導事項を教員が事前に入力									
過去の単元の成果と課題を活かす	主体的に取り組む態度										
	知・技	良さ	課題								
	思・判・表	良さ	自己理解・自己管理能力 ー 過去の学習・自分の特徴・主体的	課題	生徒が自分自身の過去の学習を振り返り記入する						
	主体的	良さ	課題								
単元を貫く学習課題 「 生徒の実態に合った興味や関心が持てる単元名にする 」											
学習の見通し	0 (/)	1 (/)	2 (/)	3 (/)	4 (/)	5 (/)	6 (/)	7 (/)	8 (/)	成果物の提出 / ()	
学習活動(例)	ガイダンス	一斉学習	単元内自由選定学習 …… 学習方法を自己選択・自己決定(内発的動機付けとなる)								
学習計画	この単元で身につけるべき力を理解する・単元の見通しを持つ		キャリアプランニング能力 ー 計画・今日の学びは将来に繋がる		人間関係形成・社会形成能力 ー 他者と協働して学習する		課題対応能力 ー 学習課題を何とかする				
目標についての振り返り	毎時間、振り返りをする。 B評価達成に対して 「できていることは何か」「できていないことは何か」。 めあてに対する学びの進捗状況、ズレをメタ認知する。 教員は、生徒の自己評価に対して適切な評価をコメントし、単元が終わるまでにB評価を達成できるように指導する。										

単元評価を出した後、保護者に押印していただく ※キャリアパスが評価の根拠となる

保護者印

- 課題設定(目標を適え、主体性を高める課題)
- 学習目標＝学習内容＝学習評価(形成的評価)

実証研究を通じた人材育成 根拠ある個別最適な学習の可能性

- 1 主体性・達成感の向上 → 自己実現
- 2 個別最適な学習 → 学力向上
- 3 組織指導 → 教育効果・実証効果向上

以上の協働実践により

- 4 不登校予防 → 個に応じた適切な指導
- 5 不登校対策 → 教室・保健室・自宅も可能
- 6 人材育成 → 教育課題改善に貢献・魅力

これまでの本研究の成果

- 1 WEBQU 学級満足度 66→100%維持
実践力向上
- 2 学力 予想される実力をほとんどの生徒が達成
1年 70ポイント NRTの成果
2年 上昇 県平均
3年 上昇 県 9ポイント↑
- 3 いじめ 4年間8件 100%解消
- 4 不登校 4年間0名
- 5 学校評価 14項目中 評価95%以上肯定

2年の人事異動でも安定度を持続・向上する 教職員組織によるエビデンスの活用

●2年ごとに管理職を含む教職員の異動

→教職員が7割異動しても生徒・保護者の満足度が高い状態をKEEP

具体的な対策

①WEBQUを活用しながら醸成した生徒の安定度の高さ

→旧教職員で継続的に尺度を活用

②新任職員 個人と集団の対応理解・旧職員と協働体制

・新任職員 一学期は、良さや成長を積極的に評価し、信頼関係を構築

・生徒も教職員との良好な関係について話し合い、旧職員にも相談する

③現状維持は集団後退→前年度を超える新たな目標と挑戦！

④新たな挑戦への不安→具体的な対応を話し合う・さりげない助言

⑤3年目：一番若い教職員⇔一番高い成果→「エビデンス・組織力」

小中連携実践



小中一体型校舎の「道志村の教育環境」で実現

○小中はじめの会



- ・異学年交流
- ・学年の枠を超えた学びの場の設定

○小中合同避難訓練



小学校の行事に中学生が参加



小中連携の具体的な改善例

1 共通指標

- ・アイチェック → ハイパーQU → WEBQU
- ・CRT → NRT

2 小中交流授業

3 道教協研修会

4 公開研究会

5 出前授業

児童の個人と集団の実態をQUで分析

担任の先生の情報に加え、学力とQU改善の指導

今後の小中連携実践計画

4月11日(木)小中合同校内研	山梨県義務教育課指導主事より指導助言
5月29日(水)小中合同校内研	提案授業: 中学校 理科
6月19日(水)小中合同校内研	提案授業: 小学校 総合的な学習の時間
7月12日(金)小中合同校内研	提案授業: 中学校 音楽
8月20日(火)小中合同校内研	山梨県義務教育課指導主事より指導助言
9月25日(水)小中合同校内研	提案授業: 中学校 数学
10月16日(水)中学校公開研究会	提案授業: 中学校 社会、理科、国語
10月30日(水)小中合同校内研	提案授業: 小学校 高学年
11月13日(水)小中合同校内研	提案授業: 小学校 低学年
11月27日(水)小中合同校内研	提案授業: 中学校 社会
12月18日(水)小中合同校内研	提案授業: 中学校 国語
2月 4日(火)小中合同授業	学活: 中学校教諭指導
2月21日(金)小中合同授業	音楽: 中学校教諭指導